

多世代コミュニティづくりのための哲学カフェ

立教大学(河野 哲也)、開智国際大学(西山 溪)

地域で多世代が交流するコミュニティ形成を目的に、美術館や図書館、公民館、記念館などの文化施設を活用し、地域の風土や記憶の価値を再発見する体験イベントと哲学カフェを継続的に実施してきた。新潟県南魚沼市では芸術作家と子ども園から高校生までが対話する美術哲学カフェ、宮城県気仙沼市では震災被害と地域の風景を語る地域哲学カフェ、沖縄では戦争体験と平和を論じる平和哲学カフェ、博多では親世代と小学生が政治的課題を考える政治哲学カフェを行ってきた。約十年の取組を通じ、各地域で対話のサークルが生まれ、地域課題を自主的に議論する動きが定着している。

総合知により目指すビジョン / 解決する社会課題

地域の価値や課題について多様・多世代の人々がフラットに対話できる場を、文化施設を中核として形成・維持し、対話を基盤とした人間関係と組織の循環を生み出すことである。これにより、自律的で参画的、かつ持続可能な地域共同体の創生を目指す。

ビジョン達成の課題

地域における対話や協働の取組は、組織的な基盤よりも個々人の人間関係に依存しやすく、異動や配置転換により関係性が断絶し、活動が停滞しやすい構造的課題を抱えている。

「矩」を超えた場づくり / 得られた新たな価値

美術館・公民館・記念館など異なる文化施設と住民を結び、多世代が共通テーマで語り合う対話空間を創出したことで、立場を越えて地域課題を共有する新たな関係性が生まれた。継続的な哲学カフェの広がりが住民主体の学び・対話文化を育てつつある。



多世代コミュニティづくりのための哲学カフェ

立教大学(河野哲也・開智国際大学(西山溪)

目的

地域で**多世代が交流するコミュニティ**を哲学カフェにを通じて形成する。**哲学カフェ**とは、一般的で誰にも関係するテーマや問いについて共に語り合い、自らの考え方も深める対話のこと。

活動の概要

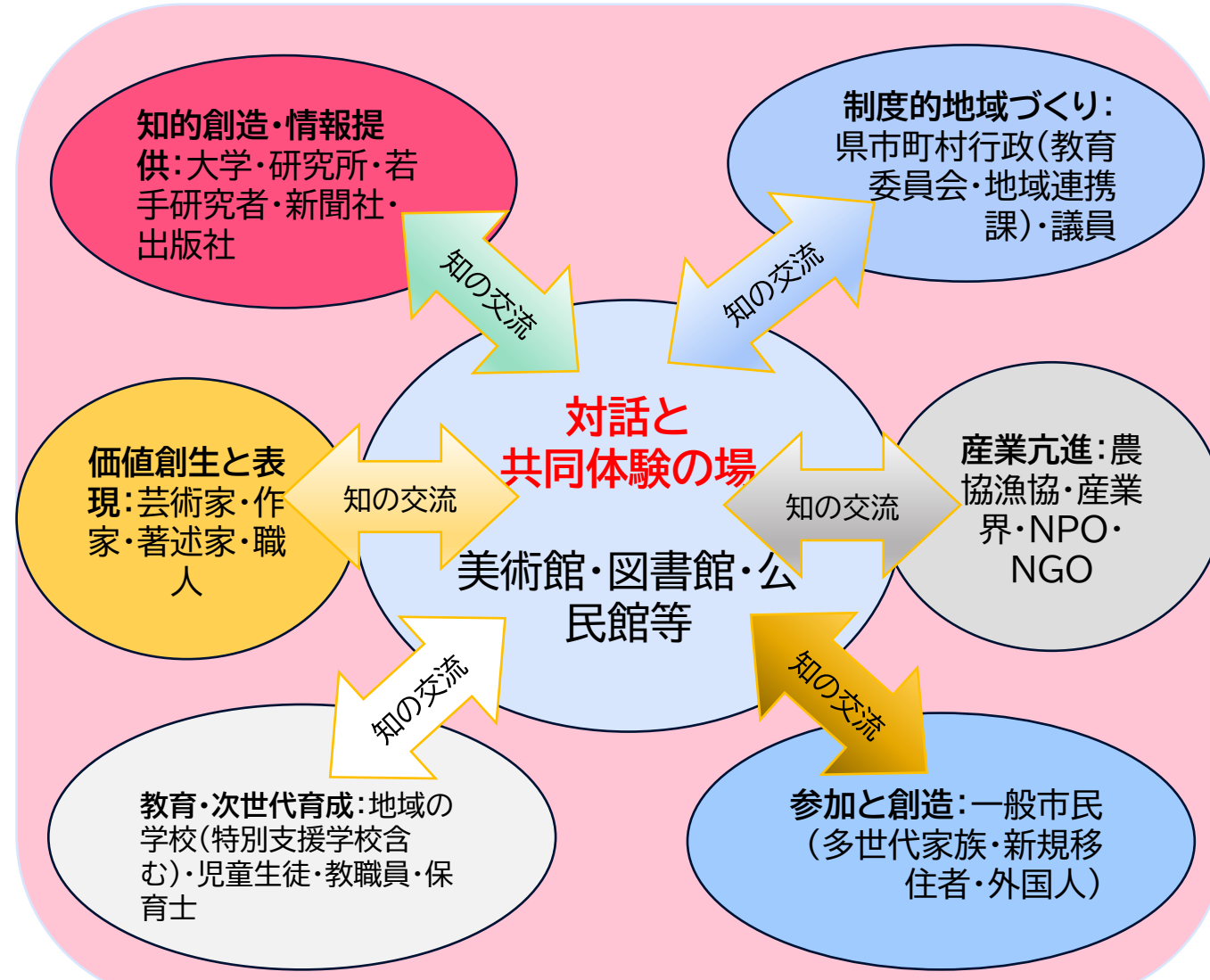
多世代コミュニティを形成するために、美術館、図書館、公民館、記念館などを利用して、地域の風土の価値を再発見する体験イベントを行った後に、地域の今後のあり方について子どもからシニア世代までが一緒になって対話する哲学カフェを実施

地域での発展

ファシリテーションの方法を学ぶことによって、多様な人々が気遣いなく自分の意見を率直に表明し、議論できる場が形成されただけでなく、それぞれの地域で、地域の重要な課題について多様なメンバーが議論できる対話を行うチームが結成された。

多様な主体と知見が交わり、多世代対話コミュニティが生まれた

- ・新潟: 芸術家の専門知 × 行政の地域知 × 住民の経験知
- ・宮城: 被災経験者の生活知 × 公民館の社会教育知 × 美術館の文化知
- ・沖縄: 戦争体験者の記憶知 × 新聞社の社会情報知 × 教育委員会の教育知 × 平和祈念施設の歴史文化知 × 子ども・市民の生活知



実績のある都道府県: 岩手県、福島県、宮城県、新潟県、東京都、埼玉県、京都府、広島県、福岡県、沖縄県

成果:各地域で対話のサークルができ、地域の人たちがその地域の課題について自主的に議論するようになった。

新潟県南魚沼市「美術哲学カフェ」:2017年から年に2-3回、池田記念美術館を場として、館長・地域の教職員、市の職員が媒体となり、芸術作家と地域の子ども園から高校生までの多世代の人々が、展示作品を前にして、作品を鑑賞しながら対話を行い、美術と地域での特徴的な制作について対話を行なった。



池田記念美術館での対話(各回参加者30名)

成果:8回に及ぶ八色の森美術展での実践によってこども園児と作家が対話し、高校生が企画する展示が行われるようになった。美術館が地域のコミュニティの核となり、ファシリテータ養成講座を学んだ地域の学校教員や保育士がファシリテータとなって、教育施設で対話するようになった。

宮城県気仙沼市「地域哲学カフェ」:2017年から年2回、市の職員、図書館員、学芸員が媒体となり、中央公民館を後して、家族と一緒に地域マッピングを行った後に地域の価値について対話をしたり、リアスアーク美術館を場として、美術館で震災被害の展示や地域の風景の価値について美学者や学芸が講演した後に、対話した。市図書館で、多世代の絵本をテーマとした哲学対話を行った。



リアスアーク美術館での講演と対話(各回参加者15名)

成果:リアスアーク美術館では、市役所地域連携課が軸となり地域が連携し、館長が提案する美術体験と、民俗学者、美学者の講演を得て、地域の人々が美的体験と美術館の意義について論じるようになった。さらに、これに参加した僧侶が寺でお寺カフェを開催するなど広がりが見えてきた。

沖縄「平和哲学カフェ」:2017年から年2-3回、平和祈念施設を場として、琉球新報社や県の教育員会、平和祈念施設の協力を仰ぎながら、戦争体験者が少なくなる沖縄で、戦争の記憶をどう伝えるか、根本的に平和とは何かについて、語り部や新聞記者の講演の後に、高齢者から子どもまでを集めて対話した。



南風原文化センターでの講演と対話(各回参加者30名)

成果:新聞社と教育委員会、元教員が核となって「チーム沖縄」が結成され、これまで対話が少ないとされた沖縄で、平和、基地、貧困、家庭、教育などの問題や課題を語り合う哲学カフェが独自に行われるようになった。また、ファシリテーションを経験した大学生がその経験を学会で報告した。